

山と博物館

第24巻 第11号

1979年11月25日

大町山岳博物館



馬市

まだ馬が水田耕作における有力な動力であったころのことである。大黒町の追分から三日町よりにかけての、大町街道の両側のレンゲの花咲く田圃の中で、五月八日と十日に馬の市があった。馬市といっても馬の売買をするのではなく、農繁期における農耕馬の短期間の貸し借りの市である。安曇野は米どころ。水田耕作は馬耕に、しろかき、かりしき取りなど馬の力に頼る作業が多かった。この馬は八坂、美麻から山続きの更科郡や水内郡の近隣の山間の部落から供給された。「仁科大町借馬市場、証も取らずに馬借せる」と安曇節にも唄われているように、馬の貸し主と借り主とが馬を前にして相対で、いまままでお互いの信用に基づいての口約束だけで商談はまともだった。そしてあとからトラブルの起ることはなかった。しかし、満洲事変の勃発から、この馬市で貸し借りされた馬は、次ぎ次ぎと軍馬という名目で徴発され、馬の数が減ってゆくとともに、農耕用としての馬の需要を充すことは出来なくなってしまう。そして、歌にまで唄われた馬市は、この頃を境としてその姿を消してしまった。

(浦和市東高砂町 横川 通)

亜高山帯の鳥

三石 紘

前回(第二十四巻第四号)では高山の鳥について述べたので、今回は登山者にアプローチと呼ばれ、時には敵遠される山麓の森林帯の鳥について紹介しよう。

日本アルプスの亜高山帯の植生は、いわゆる亜寒帯針葉樹林と呼ばれるコマツガ、オオシラビソ、それにトウヒなどから成る針葉樹中心の林と、ブナを中心とする広葉樹の林の二つのタイプに大別することができるようにです。といっても実際に森の中を歩くと、こんなに単純ではなく、ダケカンバがモザイク状に分布したり、針葉樹と広葉樹が入り組んでいたり、かなり複雑なのが普通です。地形や気象、特に積雪量や風、その他諸々の要素に影響された結果として、今日の植生が成立しているからです。

植生が異なると、そこに棲む鳥の種類も違ってきます。それぞれの種が、さまざまな生活要求を持ち、その要求を満たすのに最もよ

い環境を選択しているからなのです。ちよつと鳥に興味のある登山者なら、沢筋のアプローチで聞く鳥声と、昼なお暗い針葉樹林いわゆる黒斑のなかで聞く声とは、まるで違うことを実感しているはずですよ。

亜寒帯針葉樹林では

一九六九年から三年間、約二〇日間、志賀高原で調査をしました。第一表はコマツガやオオシラビソで構成された針葉樹林のうち、比較的自然植生の保たれた地域の結果を示しました。だいたい一時間の距離の登山路をゆつくり歩き、左右二十五メートル、つまり五十メートル巾に出現した鳥の記録です。九ヶ所のデータを集めたもので、出現頻度百分というの、九ヶ所の調査地いずれにも出現したということを示します。密度とは、一時間になん羽出現したかということですよ。また、全出現個体数に対する各種の個体数の比率が

第一表 針葉樹林の代表的鳥類

出現種	代表的な出現種	出現頻度(種)		優占度%
		%	N/時	
メボソムシクイ	メボソムシクイ	100.0	14.5	23.8
ルリビタキ	ルリビタキ	100.0	8.1	13.3
ウグイス	ウグイス	88.9	8.0	13.1
ヒミソギ	ヒミソギ	88.9	7.5	12.3
ミソサザイ	ミソサザイ	88.9	3.0	4.9
キクイタダキ	キクイタダキ	66.7	5.1	8.4
コメツガ	コメツガ	55.6	1.8	3.0
ホトトギス	ホトトギス	55.6	0.8	1.3
ツツドリ	ツツドリ	44.4	1.8	3.0
ツツドリ	ツツドリ	44.4	1.5	2.5
ツツドリ	ツツドリ	44.4	1.4	2.3
ツツドリ	ツツドリ	44.4	0.9	1.5
ツツドリ	ツツドリ	44.4	0.9	1.5
ツツドリ	ツツドリ	44.4	0.9	1.5
ツツドリ	ツツドリ	44.4	0.8	1.3

志賀高原のオオシラビソ-コマツガ林9ヶ所の調査、この他に18種が記録された(三石1973より)

優占度です。

メボソムシクイ、ルリビタキ、ヒガラ、ミソサザイ、キクイタダキ、ウソなど、が亜寒帯針葉樹林の好棲種といえます。ウグイスはモザイク状に分布するササ原の多い少ないによって密度がかわりますし、コガラは針葉樹林のなかに点在するダケカンバの量が多いほど密度が増すように思われます。

第三表 ブナ林の代表的鳥類

	1ha毎の個体数	優占度(%)
キビタキ	0.91	9.80
コルリ	0.82	8.88
シジュウカラ	1.00	10.82
ゴジュウカラ	0.72	7.78
センダイムシクイ	0.67	7.22
ヒガラ	0.61	6.55
ミソサザイ	0.47	5.04
カケス	0.40	4.33
ウグイス	0.45	4.80
コゲラ	0.50	5.41
コガラ	0.33	3.60
マミジロ	0.24	2.59

奥裾花自然園のブナ林の結果、1969~1970年の調査で、41種が確認された。(三石1970より)

第二表 志賀高原の針葉樹林の6年間の代表種のナワバリ数

出現種	1967	1968	1969	1970	1971	1972
ホシガラス	1	1	1	1	1	1
カケス	1.5	1	0.5	1.5	0.5	0.5
ウソ	2	1.5	2	2	2.5	2
キバシリ	1.5	0.5	1.5	2.5	0.5	2.0
ゴジュウカラ	1.5	1	1	1	1	1.5
コガラ	2	2.5	2	3	2	4.5
ヒガラ	12	14	12.5	12	13.5	11.0
サメビタキ	3	4.5	2	1.5	3	3.0
キクイタダキ	10	11.5	11	10	11.5	10.5
メボソムシクイ	9.5	13.5	11	13.5	12	13.0
ルリビタキ	16.5	14	16	15.5	11	16.0
ミソサザイ	2	3	3	3	3	2.0
イワツバメ	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5
ジュウイチ	1	1	0.5	1	2.5	1
ヤマドリ	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5

11haの面積の林で6シーズン調査、合計30種出現したが、上記の15種がオールシーズン出現(羽田ら1977より)

本年の六月、七月に北アルプス蝶ヶ岳の山腹通称「まめうち平」のオオシラビソ、コマツガを主体とする針葉樹林で、三回ほど密度調査をしました。特にヒガラ、キクイタダキ、ルリビタキ、メボソムシクイが、このような樹林には多いようです。そして、林内に広葉樹の低木の多い部分にはメボソムシクイが、うす暗くてコケしかかないような部分にはルリビタキが多い印象をうけました。

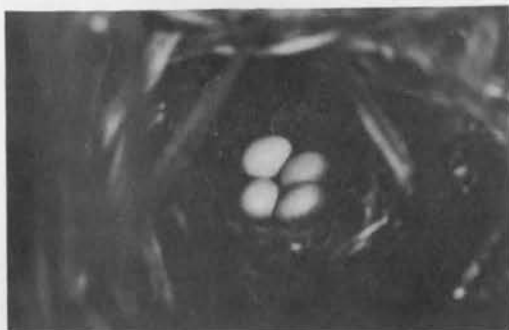
針葉樹林について、同一地域を六年間続けで密度調査をした結果があります。国際生物学事業計画の志賀山エリアのオオシラビソ、コマツガ林です。第二表で、その結果を紹介しましょう。ルリビタキ、ヒガラ、メボソムシクイ、キクイタダキの量がとびぬけて多いことがわかります。そこで、この四種を亜寒帯針葉樹林の主要四種と呼んでいます。この主要四種の優占順位は所によってかわることがあります。けれども、この主要四種が全体の密度のなかで占める割合は、どの針葉樹林でも、そう変わらない、という結果が得られています。

ブナ林では

第一図 志賀高原の各環境の優占種

優占種	環境	天然林	山頂付近	溪流沿	二次林	スキー場	集落
ルリビタキ		○	○				
クイタダキ		○	○				
ウソ			○				
ヒガラ		○	○	○	○		
メボソムシクイ		○	○	○		○	
ウグイス		○	○	○	○	○	○
オオルリ				○			
カケス				○			
エゾムシクイ				○			
コルリ				○			
センダイムシクイ				○			
シジュウカラ				○			
ホオジロ				○	○	○	
ビンズイ						○	
ムクドリ						○	
キセキレイ				○	○		○
スズメ					○		○
出現種数		32	47	50	44	32	16

各環境区の平均出現率より高い優占度の種を優占種としてある。(三石1973より)



コルリの巣卵 撮影 三石 紘
1977年6月30日
北アルプス針ノ木雪渓付近

楯花中学校・教諭)

森が切り開られると山麓の天然林は、種々の開発行為によってどしどし消えてゆく運命にあります。そうすることに伴って、鳥相も変化します。その例を第一図で示しました。鳥相によって、その地域がどれほど開発されたかを知ることができるとは、山麓の登山道を歩いていても、写真で示したコルリやメボソムシクイの鳴く林は、やはり快適です。けれどもホオジロやムクドリの多い山麓はあまり楽しめるアブローチとはいえない場合が多いことは、幾度か山登りをされた方なら、とつくにご承知のはずです。重い荷をかついでのアブローチも、小鳥の歌や、ちよつとしたふるまいに気をとめながら歩くとずいぶん楽しくなるものです。(信州鳥類生態研究グループ所属 長野市立

ブナ林は針葉樹林にくらべ、極端に分布面積が少なく、大群落は中部山岳地帯の北部の多雪地帯に点在するにすぎません。しかし、小群落はモザイク状に分布するので、たとえば針ノ木雪渓の下部の沢筋などのように、登山のアブローチでも、わりあい接することができます。新緑も紅葉も美しい林です。第三表に、私の調査したブナ林の鳥相の一部を示しました。ミズバショウで有名な奥羽花自然園の自然観察路ぞいのセンサス結果です。また第四表は信州鳥類生態研究グループが長野県下五ヶ所のブナ林を調査した平均値です。両方の結果を較べると優占種の構成が、前に述べた針葉樹林とはちがって、かなり異なることがわかります。この原因は、ひとくちにブナ林といっても、構成する樹種が地域によって異なり、ブナ林が小規模なために他の林相の鳥が棲み込んでいるためです。たとえばヒガラなどは、ブナ林の中に数本のコメツガが入り込んでいても充分生活できる

林の主要四種のように、ずばぬけて優占度の高い種はありません。生息環境が複雑なので、つまりさまざまな樹種が入りこんでいるので、それだけ多数の種類の種類が棲むことが可能である

第四表 長野県下の代表的ブナ林の鳥類

種名	鹿	戸隠	カヤノ平	赤石岳	鬼無里	出現頻度	平均密度
1 ヒガラ	11.35	3.60	4.68	7.93	1.62	100	5.84
2 ヒコ	8.33	0.67		0.67		60	1.93
3 シジュウカラ	0.71	2.55	3.26	0.92	0.57	100	1.60
4 コク	3.27	2.22	1.36			60	1.37
5 コク	0.30	0.54		0.30	2.91	80	0.81
6 サシ	0.28				2.35	40	0.53
7 セン		1.64		0.86		40	0.50
8 セン		0.51		1.60		40	0.42
9 サキ		1.65	0.14			40	0.36
10 サキ	0.41	0.79				40	0.24
11 ウグ	0.61		0.13		0.40	60	0.23
12 ヤマ		0.80		0.18	0.18	60	0.23
13 アミ	0.14	0.39	0.12	0.07	0.31	100	0.21
14 ツツ			0.80			20	0.16
15 ツツ	0.29		0.30			40	0.12
16 カジ	0.10	0.16	0.16		0.12	80	0.11
17 ケウ		0.37	0.19			40	0.11
18 アマ					0.44	20	0.09
19 ニュ		0.33				20	0.07
20 ヨ	0.15	0.18				40	0.07
21 イカ	0.30					20	0.06
22 トギ	0.16				0.16	40	0.06
23 ジウ				0.13	0.26	20	0.05
24 オキ			0.08	0.13		40	0.04
25 オキ			0.13	0.01		20	0.03
26 アコ	0.12					40	0.03
27 コク		0.08				20	0.02
28 マシ	0.04					20	0.01
29 ハシ	0.03	0.07				20	0.01
30 ハシ						20	0.01
31 ハシ			0.05			20	0.01
32 キ	0.01				0.01	40	0.01
出現種数	18	17	14	9	12		

1 haの個体数を示す(信州鳥類生態研究グループ 1977より)



メボソムシクイの雛 撮影 三石 紘
1979年8月14日 火打山 高谷池付近

木の実の酒・木の酒の楽しみ

— 山麓の材料を使って — 清 沢 由 之

しばらくの間、九月以来何人かの人々や私をもとりにしたキノコの種類がぐんと少なくなってしまうのは、ここ大町では十月の半ばである。この頃になると私はチャナメツムタケやシロナメツムタケ、キヌメリガサなどを採しながら眼を足もたら上へと向ける。春以来、道端の桑畑からクワグミをいただいたり、夏はモミジイチゴの実を漬けたりしているのが常だが、秋の野山には果実の酒にもってこいの材料が次々と出てくれる。

長くおきすぎると味も色も落ちる。さて味の方だが、これも十種十色、種々である。しぶみの残るもの、酸味のあるもの。また香りもいろいろである。サロメチル様のもの、洋酒のバイオレット様のもの(こぶしの花)など。薬効等については、私はあまり自信はないが、お客さんには適当に言ってみよう。また、たびたびお会いできるようなところである。

1、基本的な作り方と飲み方

たいして酒を好む方でもない私がこんな酒づくりにとりつかれたのは二十年ばかり前、村の山の尾根道で赤く色づいたあの美しいコケモモの実を摘んで来たのが始まりだったように思う。以来、毎年熱心に行ってきたというわけではないが、この病いが七、八年前頂点に達したというか、かれこれ百種を越えたように思う。ピンの置き場所がなくて困った木の根、草の根、樹皮、花、実と山野のもの、家のまわりのもの、はては、マンゴー、パパイヤ等外国産の果実を求めて大きな果物屋さんを物色して歩いた。今人気のキウイを知ったのもその頃である。マンシや後にはスズメ蜂なども試みた。秋口に焼酎十本などと注文するので酒屋さんに今頃何に使うのかと質問された。ともあれ、漬け込んで、日数がたつにつれて浸出してくる色の変化がまず楽しみである。材料によって異なるが、三ヶ月すれば殆ど飲みごろになる。コクが出るという点で長く置いた方がよいものもあるが、ついでだが、手づくりの果実酒類の場合、全て長く置けば置く程ということはないようだ。三年くらいで交替がよさそうである。堅い木の酒などは別と思うが柔かい果実などの場合、

材料をできるだけきれいにし、器に入れ、その三倍ほどの35度のホワイトリカーを入れる。(時には、ウイスキーやブランデー、ホワイトウイスキー等も使う。)甘味に氷砂糖か蜂蜜を少々入れる。入れないこともある。時に材料によっては味を引きしめるためレモンを補う。柔かい果実やレモンは二十日程で引きあげて熟成を待つ。時に二、三種混合して漬けてみることもある。あとは二、三ヶ月比較的温度の変化の少ない場所に貯蔵する。気がつけばたまに振ってやる。ただそれだけである。飲む方はお好きなように。ストレート、水割り、ミックス、カクテル、炭酸水で割る等々。ケーキの味付けにも使えよう。

2、秋を中心とした山野の材料

【木の实】
マツササ—大町地方では松ブドウ、松フジ。濃い赤紫色、独特のマツの香りが特長。
ナツハゼ—コンマルハジキ(穂高地方)シリノコナシ(東筑南部)。適当な酸味と色も紫の強い赤ですばらしい。
ガズミ—うすい赤橙色に仕上がる。淡

い酸味さわやかな味。オトコヨゾメも。ナナカマド—時期にもよるが、わずかなしぶ味。色は桃と橙の中間で野趣がある。
マタタビ—独特のマタタビ臭があつて、人によっては飲みにくい。私はレモンと一緒につけることが多い。
サルナシ・ミヤママタタビ—華南原産でニュージーランドから輸入の多いキウイの仲間日本でも最高に美味の果実と折り紙をつける人も。意外なところにあるが、やぶが切られてしまい、いざ探すと雄雌異株のせいかもしれない。琥珀色と独特の風味は格別。畑で作るマツササ同様今では貴重品と言えるかもしれない。琥珀色と独特の風味は格別。畑で作るうときし木で大きくしたがなかなか実がつくに至らない。

【その他の実】ズミ(コナシ)、オオバノキ、カワラグミ、ヤマボウシ、ケンボナシ、クサボケ、味づけにはサンショウなど味わいの深いものが多い。ただ今年の例をみると、山の木の实が少なかつたせい(その根底には、奥山まで伐採が進んで動物たちの住み家が奪われている。)里近くまで熊のタナがあつたり、いつもなら今頃まだなっている木の实も鳥などにつつかれている。楽しむのはいが、野生の動物たちのエサを奪っていたのではないかと反省もさせられているこの頃である。ともあれ食用は別にしても秋の山には眼を引く美しい木の实が多い。ノブドウ、マユミ、ヒヨドリジョウゴ、ルリミノウシコロシ、ムラサキシキブ。

【木そのもの】

クロモジ—皮つき楊子にするあの独特の香りの灌木。淡い琥珀色。好みもあるうがただよう芳香。
キハダ—胃の薬として有名な木。濃いウイスキー色。特色ある苦味。
ミズメ—(アズサ、ヨグソミネバリ)サロメチル様の香りが特色。ウラジロカンパ、ウワミズザクラの実も似た酒になる。

その他では、薬草として名高いイカリソウ、ゲンノシヨウコやヒキオコシ等も。

【花】
春だが、コブシ、タムシバは花の匂いがそのまま酒に移る。桜の花にたっぷり糖分を入れると、これはまたなんともいえない女性好みの酒になる。秋のキクの仲間も苦味が個性的である。

【キノコ類】

マツタケ、アンズタケ、タマゴタケ、イイタケ、サルノコシカケ類数種のミックス等を試みた。香りが残る点ではマツタケ、シイタケ。サルノコシカケはやはり薬酒の感じ。

昨年は私の通わせてもらったツガの原生林が切られて悲しかった。今年は勇んで登ったが、サルナシのやぶがすっかり切られてしまった。他人さまの物だから仕方がないが山のけものたちや私ごとき者のためにも残せるやぶは残しておいてほしいと願うものである。

(長野県山岳総合センター職員)

博物館だより

・ライチヨウ寄付金

一〇〇〇〇円 大阪市大淀区豊崎二丁目四一五岸ビル2F世界野生生物

基金日本委員会代表朝日 稔

・扇沢よりカモシカ下山

10月26日扇沢カモシカ園で飼育されていた2頭のカモシカが山博放棄園におろされました。

山と博物館 第24巻 第11号
発行所 長野県大町市TEL②〇二一
印刷所 大町市 俣町山岳博物館
大 町 市 俣 町 山 岳 博 物 館
大 糸 田 ム ス 印 刷 部
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野)一三、二九三